

日本学術会議社会学委員会「社会理論分科会」第24期・第2回会合
(2018年7月8日 於学習院大学東2号館8階第一会議室 14:00-16:00)

議事要旨

出席者

今田高俊 江頭大蔵 遠藤薫 盛山和夫 佐藤嘉倫 園田茂人 友枝敏雄 三隅一人
矢澤修次郎 山田真茂留 吉原直樹

欠席者

真鍋一史 町村敬志 村松潤一 渡辺秀樹

議題と決定事項

前回の議事要旨を読み上げ、内容を確認したうえで以下の議事に入った。

(1) 今期の活動方針（継続）

本分科会各委員から口頭及び書面で、社会理論の有用性や今期の具体的な活動の提案について報告がなされた。

具体的には以下のようなトピックが話題に上った。

・社会学理論版の「クロスロード」（ゲーム形式の一種の教材）を開発するなど、社会設計の際に必要な視点を供給する試みをしたらどうか。／・経済活動のグローバル化によって変容する社会的現実を説明するための社会学理論の革新を目指したシンポジウムや書籍の出版を考えたらどうか。／・より広い人文社会系学術の重要性をアピールするための政策・提言をすることを軸に、活動を考えればいいのではないか。／・共同体、家族、世代を含めた存在論をベースにした社会理論の構築が大事であり、社会学以外の社会科学者も含めた議論が必要ではないか。／・「日本型システム」への理解を深めていくといいのではないか。／・分極化するグローバルな世界の中でいかに連帯を作り出すか、という問いについて探究していくといいのではないか。／・日本の社会学理論受容を歴史的に振り返りながら、そこに継続性が見られた理由を模索したらよい。／・「共同性・公共性」を軸に、社会学以外の領域の研究者とのシンポジウムを実施したらいいのではないか。／・自分たちが作ってきた社会学理論が何を生み出したかを検証し、その有用性を検討する必要があるのではないか。／・高校生にでもわかる社会学理論の財産目録を作ってみることで、本分科会の貢献が表現できるかもしれない。／・ローカル・ナレッジ、境界知、媒介知の重要性に注目する必要があるのではないか。／・寛容な社会をテーマとする案もあるのではないか。／・モノではなくプロセスとしてのサービスが中心となる新たな社会について考える必要があるのではないか。

(2) 新委員による報告・討論

三隅委員から「社会関係資本と災害」と題する報告がなされた。公共財やフリーライダーの問題、望ましい防災社会構造のあり方などが論じられたうえで、そこから社会理論を鍛える必要性についての示唆がなされた。

質疑応答では、災害による社会理論の彫琢とはどういう意味か、などの質問が出された。

(3) その他

今期の活動に関し、今までのような形のシンポジウムの開催だとおざなりな議論に留まるのではないか、もっと本格的な討議を分科会の内部で展開していくべきなのでは、といった意見が出された。

今回の議論を踏まえ、次回委員会までに世話人で再度協議を行う。その結果前期同様に、2名をペアにしたような形でシンポジウムの企画をお願いすることになるかもしれない。

次回委員会の第一候補は10月27日（土）で、第二候補は10月21日（日）。時間帯は午後2時から4時までとする。場所は今回と同じ。今回欠席していた委員にも照会をかけたうえで、日程を決定することとした。